



一般社団法人NOOK

「聞く」で 社会をつなぐ

NOOKの記録と表現の実践

わたしたちNOOK(のおく)は、地域の記録を調べて展覧会をしたり、
記録されたものを囲んで対話する場をつくったり、
表現の技術を共有するワークショップをひらいたり……
地域やコミュニティ、公共施設、NPO、企業など、
多様な人びととかわりながら、記録と表現の実践を重ねています。

東日本大震災以降、
仙台市内や三陸沿岸地域で活動していたアーティストや研究者らが、
自ら記録したものを地域社会に還元するために2015年に設立しました。

震災をきっかけに生まれたコレクティブのため、
各地の災禍の現場や郷土史にかかわることが多いですが、
わたしたちの活動の中心は「聞く」にあります。

出来事の実験者に話を聞き、記録をする。
積み上げられた記録をひもとくために、インタビューをする。
聞いた語りを受け止め、表現としてかたちづくる。
話を聞き合う場をひらき、コミュニティを耕す。

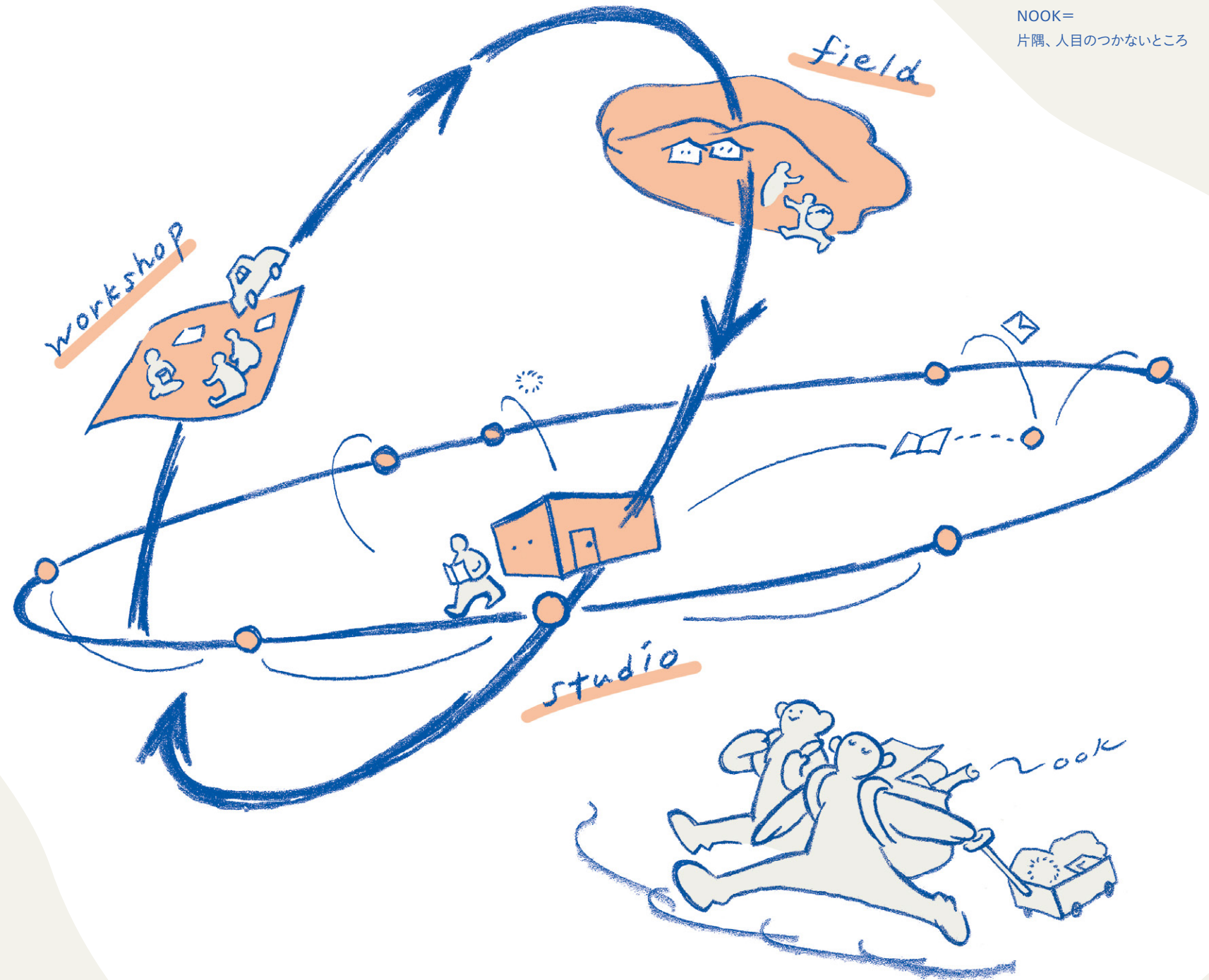
わたしたちは、記録と表現の実践を行き来しながら、
さまざまな「聞く」コミュニケーションをつくっていくことで、
緻密で広がりのある、同時代的なネットワークを育てていきます。

名前の由来

陸奥(みちのく)の「のおく」

NOOK＝

片隅、人目のつかないところ



東京都江東区にあるアートスペース「Studio04(ゼロヨン)」を拠点に、各地に在住するメンバーとともに活動しています。プロジェクトに合わせて、ファシリテーターやアートマネージャーなど外部の仲間とも連携しています。



Studio04



瀬尾夏美

代表理事／アーティスト・作家

1988年東京都出身。東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻修了。土地の人びとの言葉と風景の記録を考えながら、「語れなさ」をテーマに旅をし、絵や文章をつくっている。著書に『あわいゆくころー陸前高田、震災後を生きる』（晶文社）、『二重のまち／交代地のうた』（書肆侃侃房）、『声の地層ー災禍と痛みを語ること』（生きのびるブックス）がある。NOOKでは企画・制作、ワークショップ等のファシリテーターを務める。



小森はるか

理事／映像作家

1989年静岡県出身。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。映画美術学校フィクションコース初等科修了。東日本大震災をきっかけに、人びとの語りや暮らし、風景を映像で記録している。主な監督作に『息の跡』（2016年）、『二重のまち／交代地のうたを編む』（2019年／瀬尾夏美と共同監督）、『春、阿賀の岸辺にて』（2025年）がある。NOOKでは映像撮影・編集、会計を担当。



細谷修平

理事／美術・メディア研究者

1983年東京都出身。和光大学大学院社会文化総合研究科修了。桐朋学園芸術短期大学非常勤講師。1960年代の芸術と政治、メディアをテーマに、アート・ドキュメンテーションを行っている。主な編著に『メディアと活性ーWhat's media activism?』（インパクト出版会）、『反万博の思想 加藤好弘著作集』（河出書房新社）がある。NOOKではアドバイザーを務める。



中村大地

劇作家・演出家

1991年東京都出身。東北大学文学部卒。在学中に劇団「屋根裏ハイツ」を旗揚げし、仙台・横浜・東京をゆるやかに行き来しながら、人が生き抜くために必要な「役立つ演劇」を志向して創作を続けている。「利賀演劇人コンクール2019」では、チェーホフ『桜の園』を上演し、優秀演出家賞一席と観客賞を受賞。NOOKではマネジメントや番組配信を担当。



佐竹真紀子

美術作家

1991年宮城県出身。武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了。被災地域で見聞した風景や暮らしの情景から着想を得て、絵画とテキストを制作している。絵の具を何層にも塗り重ね、彫刻刀で色を削り出す手法を用いて、土地や人びとの記憶の地層を掘り起こす表現を思考している。NOOKではワークショップ等のファシリテーター、イラストレーション制作を担当。



磯崎未菜

アーティスト

1992年東京都出身。東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。特定の土地に根づく童謡や労働歌などを手がかりに、場所に添う新たな「うた」をつくるプロジェクトなどを行っている。2023年から24年にかけて、リトアニアで旧ソビエト連邦からの独立を目的とした「歌う革命」のリサーチを行ってきた。NOOKでは企画・制作、映像撮影・編集を担当。



関優花

美術作家・版画家

1997年埼玉県出身。横浜国立大学大学院都市イノベーション学府Y-GSC修了。芸術業界でのハラスメント被害を公表した安西彩乃さんの支援団体「Be with Ayano Anzai」代表。心的外傷とは何か、そしてそれはどのように回復しうるのがかを問いとし、版画やパフォーマンス、ワークショップなどの表現活動を行っている。NOOKではマネジメントや蔵書管理を担当。

「聞く」ことを軸に、大きく4つの活動を行っています。
単発のプログラムから複数回にわたるもので、
一緒にする相手や状況に応じて、
さまざまなかたちで実施しています。

ワークショップ

話を聞き、応答する



誰かの語りにじっくり耳を傾け、応答するプロセスを大切にしています。たとえば、聞き書きワークショップでは、「あなたの大切な場所」などをテーマに参加者同士でインタビューを行い、相手から聞いた話を文章にまとめて朗読します。他者の話をどのように受けとめ、言葉として編み直すか。そのプロセスは、表現の工夫や倫理を考える機会になるとともに、「聞く／聞かれる」こと自体が、互いのケアにもつながっていきます。また、過去の出来事や誰かの語りを出発点にリサーチし、さまざまなメディアで表現するワークショップも行っています。

対話と実践の場づくり

安心して考え、動き出せる場

哲学カフェや講座、読書会など、さまざまな対話の場をつくっています。日々のなかで立ち止まることが難しい問いや感情に、誰かとともにゆっくり向き合う時間をもつことで、それぞれが一步踏み出すことができるような場を目指しています。



スタディツアー

災禍の地から、未来を考える旅へ



異なる経験を重ねてきた地域や人びとをつなぎ、学び合うためのプログラムです。大切にしているのは、痛みや経験を一括りにせず、土地ごとに蓄積された回復の知恵や技術に目を向けること。その土地の営みの細部に触れることで、他者への想像力が育まれ、自分の暮らす場所を新たな視点で捉えるきっかけになります。

〔過去の訪問先〕

岩手県陸前高田市／宮城県丸森町／
能登半島／広島県広島市／
沖縄県宜野湾市など

メディアづくり

声や記憶をかたちにして残す、伝える

災禍やケアの現場で活動する人びとの知見や、わたしたち自身が各地で見聞きした経験をもとに、YouTube番組やポッドキャスト、本、展覧会など、さまざまなメディアづくりを通じて、地域や個人に刻まれた出来事を広く共有し、異なる場所や人をつなぐ試みを行っています。街頭インタビューやゲストとの対話、手記の朗読など、多様な声に耳をすませながら、集合的な記憶や記録の継承、そしてその「分有（シェア）」について考え、発信しています。オンライン配信では、企画・収録・編集・配信を一貫して手がけています。



ワークショップ

記録から表現をつくる

2022年から、「災禍の記録＝禍録(カロク)」を通して、記憶の地層を掘り起こすプロジェクト「カロクリサイクル」を行っています。毎年夏に開催している「記録から表現をつくる」は、公募で集まった人たちとともに、残された記録を見る、あるいは新しく記

録をすることから、表現をつくるワークショップです(全5回)。作品としての完成を目指すのではなく、自らの関心を他者と共有し、対話するためにかたちをつくる。こうした営みを通して、災間をともに生きるネットワークづくりを行っています。

主催：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、一般社団法人NOOK



レクチャー

記録は、自分自身が目撃したもの、あるいは他者から受け取ったものを未来の誰かに手渡すためにかたちを与える行為。「記録から表現をつくる」とはどういうことなのか？ レクチャーとワークショップを通して記録の効用や事例を共有し、記録と表現のハードルを下げることで、参加者が自分なりに歩み出すきっかけをつくります。



フィールドワーク

東京都立第五福竜丸展示館を訪れ、学芸員による展示解説や、ビキニ事件の証言の朗読をするワークショップなどを体験。記録を使った表現の実践を学んだうえで、参加者自身でもやってみます。フロッタージュによって展示館付近の地面を紙に転写したり、当事者の証言を使ったパフォーマンスをしたりする人も。



展覧会

参加者はそれぞれリサーチを深め、作品をつくり、展示として発表します。マレーシアにおける太平洋戦争の歴史や、外国人としての視点で自分の暮らす団地の歴史を扱った作品など、テーマも表現形式もさまざま。互いにじっくり鑑賞し、感想を交わします。「一緒に現地に行こう」「グループ展をしよう」という話も出るなど、記録と表現のサイクルが動きはじめています。



メディアづくり

つくる手 さぐる手 かきわけて

障害のある作家たちがつくった作品と、かれらの手探りの歩みをたどる展覧会を行い、作家ごとに冊子を制作しました。一つひとつの作品と出会い、本人や周りの人たちに話を聞き、かれらの生活記録を行った一冊。巻末には記録を通して見えてきた、その人の作品や制作についてのレポートを掲載しています。作品をつくる背景をひもとくと、個人としての動機以外にも、家族や介助者との協働作業、社会福祉的な試みの痕跡などが見えてきます。

主催：やわらかな土から、せんだいメディアテーク
企画：特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン、一般社団法人NOOK



インタビュー

本人やご家族、介助者など、さまざまな人にインタビューを行います。

作品図鑑

多様な作品をテーマや技法ごとに分類し、その特徴を読み解きます。

制作プロセスの記録

ある日の制作プロセスを写真と言葉、映像で記録しました。



一般社団法人NOOK編
『立ち上がりの技術01』
(野尾久舎、2019年)

さまざまな困難や、なんとかしたい現状から「立ち上がるための技術」について、2つの展覧会「つくる手 さぐる手 かきわけて」と「語り野をゆけば」を通して考えた一冊。応用可能な表現の技術について探りました。

10年目の手記

東日本大震災から10年。「言葉にしてこなかった“震災”にまつわるエピソードを教えてください」。そんな呼びかけをして、日本中から75本の手記が集まりました。特別選考委員の小野和子さん（民話探訪者／みやぎ民話の会）にコメントを寄せてもらい、10年目をきくラジオ『モノノーク』では俳優による

朗読を行いました。ふと思い出したこと、忘れられないこと、忘れたくないこと。一人ひとりの経験を分かち合い、これからとともに生き抜くためのヒントを受け取りました。

主催：東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業（Art Support Tohoku-Tokyo）
企画・運営：一般社団法人NOOK



「3.11とアーティスト：10年目の想像」

水戸芸術館現代美術ギャラリー（2021年）

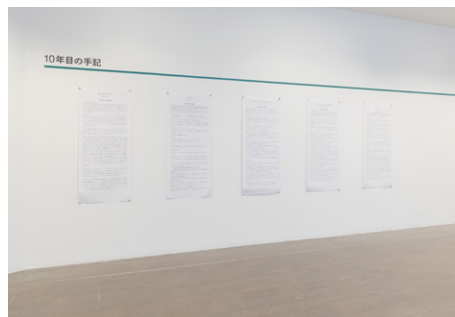
震災から10年目に開催された、作品を通じて厄災に応答しているアーティストによるグループ展。会期中に手記を募集し、「10年目の手記」の展示を行いました。また、NOOKのメンバーであるアーティストユニット・小森はるか+瀬尾夏美と佐竹真紀子も展示に参加しました。

瀬尾夏美・高森順子・佐藤李青・中村大地・13人の手記執筆者著

『10年目の手記 震災体験を書く、よむ、編みなおす』

（生きのびるブックス、2022年）

NOOKのメンバーと阪神淡路大震災の手記を研究する社会心理学者、文化支援事業のプログラムオフィサーが、暮らす土地も被災体験もさまざまな手記を読み、自身を重ね、語られなかった言葉を想像しながら語り合いました。他者の声に耳をすます実践の記録です。



撮影：根本譲 写真提供：水戸芸術館現代美術センター



カロク探訪ツアー

災禍の歴史をもつ土地を訪れ、人びとの営みや回復の知恵にふれる学びのプログラムです。被害を知るだけでなく、その土地に積み重ねられた経験をじっくり聞き、ともに考えることで、自分たちの暮らしや未来を見つめ直すきっかけを

つくります。ツアーの内容は、目的・対象・日数に応じて柔軟に設計可能。学校教育やゼミ合宿、大人の学びの旅としてなど、さまざまなかたちで実施することができます。

例1 宮城+岩手(3日間)

災禍からの回復をたどる、東北をめぐるツアー

主催：小森はるか+瀬尾夏美、株式会社SOON

- 事前レクチャー（オンライン）
- 1日目|石巻市 石巻市震災遺構大川小学校の訪問、北上川河口地域でのワークショップ
- 2日目|陸前高田市 復興エリアのフィールドワーク、地元の人とのディスカッション
- 3日目|丸森町 豪雨被災エリアや復興遊砂地を訪問。最後に全員で振り返り



例2 能登半島(3日間)

大きな自然災害を経験した、能登の「いま」を歩くツアー

主催：奥能登珠洲ヤッサープロジェクト 企画・運営：一般社団法人NOOK

- 1日目|金沢市～珠洲市 内灘町を歩き、「本町ステーション」でディスカッション
- 2日目|珠洲市～輪島市 地元の人に地震と豪雨の跡を案内してもらい、「いろは書店」や「スズレコードセンター」を訪問
- 3日目|輪島市三井町・門前町 「復耕ラボ」のお話を聞き、「ばら園」で地元の人と交流
- 哲学対話形式での振り返り（都内／オンライン）



例3 広島・似島(日帰り)

被爆から80年、広島を多角的に学ぶツアー

広島市現代美術館コレクション展2023-II

「コレクション・リレーションズ[ゲストアーティスト：小森はるか+瀬尾夏美]」関連プログラム

- 当日|広島市内をフィールドワークの案内人と歩き、フェリーで似島へ。島内を郷土史家の案内でめぐり、地元の人と語らい、現地に息づく記録や記憶にふれる



てつがくカフェ

普段当たり前だと思っていることや、最近気になることについて、集まった人と一緒に語り合う場です。お茶を飲みながらゆっくり、自分の考えをあらためて言葉にしたり、相手の話を聞いたりして、対話によって思考を深めていきます。グラフィックレコーディングで対話を可視化しながら、「自由に話す→キーワードを出す→問いをつくる」というプロセスを進めていきます。

〔過去のテーマ〕

「なぜ人は語る／聞くの？」

「作品を見るとは？」

「風景ってなんだろう？」など



とある窓

「その窓から何が見えていましたか?」。生活空間と外の環境をむすぶ「窓」を出発点に「とある窓」をめぐる語りを記録した冊子と、窓から見えるそのまちの風景写真による展覧会です。2018年は、岩手・宮城・福島を取材して実施。2023年は、公募で選ばれた10名の参加者と江東区で取材・執筆を行いました。窓という装置を通して、その土地の現在・過去・未来が浮かび上がってきます。

〔過去の開催地〕

宮城県仙台市、東京都江東区



テレビノーク

月に一度、リサーチで出会った土地や出来事、人びとについてYouTubeで番組を配信中。「災禍の記録＝禍録(カロク)」に関するゲストを招き、語らいます。災禍の現場で活動する人、禍録を丹念に読み解き、同時代への共有を試みる人などの話を聞きながら、それぞれの接点を見出していく、オンラインのプラットフォームです。

〔過去のテーマ〕

東日本大震災、ハンセン病、関東大震災、

インドネシア・スマトラ島沖地震、原爆、沖縄、

能登、戦争、水俣病、マーシャル諸島など



のと部

2024年の能登半島地震をきっかけにはじまった「のと部」。月に一度集まり、それぞれの関心や特技を持ち寄って、東京から能登を応援する活動を行っています。毎月の参加者は約30名、部員登録数は140名ほど(2025年9月現在)。現地での活動報告を行い、ボランティアや茶話会の準備、能登とつながるラジオ『のと』の制作、SNSでの発信、情報整理、グッズ制作など、班に分かれて手を動かしています。



((法人概要))

法人名称

一般社団法人NOOK

設立日

2015年4月27日

主な事業内容

展示会の企画・調査・制作

ワークショップの企画・運営

文化拠点の企画・運営

配信番組の企画・制作

事業記録の企画・制作(テキスト、写真、映像など)

視察・研修のコーディネート・アドバイス

主な連携先

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

独立行政法人都市再生機構(UR都市機構)

公益財団法人仙台市市民文化事業団

特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン

3.11オモイデアーカイブ

所在地

〒136-0072

東京都江東区大島四丁目1-1

大島四丁目団地1号棟106 Studio04

連絡先

電話 050-7110-5989

メールアドレス info@nook.or.jp

ウェブサイト http://nook.or.jp

((SNS))

YouTube



Instagram



Facebook



X



note



((ご寄付のお願い))

現在取り組んでいるプロジェクトを継続し、時代に応じて新たな挑戦をし続けるために、ご支援をお願いいたします。

下記にて、ご寄付をお受けしています。「領収書」と「税額控除に係る証明書」が必要な場合は、メールにてご連絡ください。

銀行

ゆうちょ銀行

ハ－八支店

普通3312522

シャ)ノオク

郵便局

シャ)ノオク

記号:18190

番号:33125221

クレジットカード

決済システム「conggrant」

<https://congrant.com/project/nook/18737>



定期購読マガジン『NOOK LETTER』

毎月1回、noteにて月額550円(初月無料)でオンラインマガジンを配信しています。メンバーが順番に、旅先で出会った経験をもとに「語らいの記録」「今月の絵手紙」「今月のエッセイ」を連載中です。



希望される方は、こちらからご登録ください。



